

# 地母神・エヴァ・魔女 —魔女の元型を求めて

鎌 田 道 生

はじめに

魔女 (Hexe、英語 witch、hag、仏語 sorcier, ière)

太古以来、シャーマン、呪術師、占い師、薬草を扱う人、産婆などは社会の中で賢人として畏怖の対象だった。魔女もその系列に連なり、悪魔と結託し、魔術を使い悪事を働く存在とみられ人間社会との境界の外に住む存在、しかも賢い女性 (weise Frau) と呼ばれていた。<sup>1</sup>

それがキリスト教社会の中でスケープゴート (scapegoat) として全面的に登場するのは15世紀頃からです。スケープゴートと言えば、旧約聖書の「創世記」22章の記述がまず思い浮かぶ。神に信仰を試されたアブラハムは我が子イサクを神への捧げ物として差し出し、命じられた場所で我が子を殺害しようとする。だが剣を振り上げた瞬間、神の許しの言葉が鳴り響き、イサクは救われる。レンブラントを始め数多くの画家たちが題材に選んだ物語です。その時、イサクの代わりに生け贄として山羊が捧げられる。これはユダヤの習慣「スケープ・ゴート」の一例です。魔女が社会の中で「何物かの代わりに」命を奪われる社会現象は今日に至るまで多様な形態を取りながら存続している。いや今ほど魔女的存在の比重が増している時代はないと筆者には思われる。

ドイツ語の魔女を意味する Hexe は、H・パウルの *Deutsches Wörterbuch* によれば古高ドイツ語 Hagazussa に由来するとのこと、原

意は「垣根、柵のところに坐っている女」です。垣根や柵は街の外れにあり、人間社会と自然界を分かち場所と解釈すれば、魔女は町外れに住みつつ人間界に影響を及ぼす存在ということになる。加害者にしてまた被害者にもなりうる両面性を有した存在です。

中世から近世への移行期15世紀から16世紀にかけてのドイツでは、ロッテルダムの人文主義者エラスムス（Desiderius Erasmus 1466ごろ-1536年）のカトリックの権威主義に対す強烈な風刺文（『痴愚神礼賛』など）を皮切りにそれを受けてのルター（Martin Luther 1483-1546年）やカルヴァンやツヴィングリなどの宗教改革が始まり、それらに対抗するようにイエズス会をはじめとする反宗教改革や異端審問が続き、農民戦争や宗教戦争、そして各種の政治と宗教を巡った権力闘争が続き、その後ドイツ全土を巻き込んだ三十年戦争が発生する。また気象学で小氷期と呼ばれた干ばつの続いた天候のせいで、飢饉が蔓延しペストが大流行する。1347年から1357年に掛けてペストの犠牲者は2,500万人、当時のヨーロッパの人口の3分の1に達した。そこに不安の時代、終末論が西欧世界を覆う風潮が生まれます。北方ルネッサンスの芸術家と言われるネーデルラントのボス（1450ごろ-1516年）を始め、その影響下にあったブリューゲル父（1528ごろ-1569年）の絵画、またデューラー（1471-1528年）やクラーナハ（1472-1553年）の絵画、特に地獄や天国を描いた絵画群に表される悪魔や魔女、天使やマリアの像はこの変革の時代のパノラマを提示する。<sup>2</sup>

こうした時代背景を経て魔女という虚構の概念は次第に存在感を増し、社会不安を掻き立てる要因の一つとして挙げられるようになり、市井の人々が魔女として裁判に掛けられるようになった。魔女は大半は女性、地域によっては男性の魔女 Hexer もいたが、15世紀末から約三百年の間に6万人が処刑された。社会の周辺部に住む貧しい人々、反権力、体制批判者、錬金術師や天文学者、また稀に権力者や金持ちなど、大衆の嫉妬の対

象になった人々も混じった。<sup>3</sup>

民間に定着した魔女のイメージは、箒に跨がり、サバト（本来、安息日の意味、ここでは魔女の集会）に向かう絵図の数多くに見られる。プラド美術館にあるゴヤ（1746-1828年）の「サバト」やグスタフ・シュパンゲンベルク（1828-1891年）の「ヴァルプルギスの夜」（1862年作、ハムブルク市立美術館蔵）は特に有名です。また20世紀になっても世紀末ウィーンの建築家にして画家、舞台美術家だったオスカー・ラスケ（1874-1951年）の描くラミア（ギリシア神話の怪物）や魔女の銅版画、また北ボヘミア出身のアルフレート・クービン（1877-1959年）のリトグラフによる魔女像などがあり、魔女が今なお人々を虜にする力を持ちつつ変容してゆく様子が伺える。魔女は何処からやって来てどのように変貌したのだろうか。

### 魔女を求めて古代ギリシア・オリエントの世界へ

昨年2015年の春、大阪文化館・天保山で「魔女の秘密展」が開かれた。筆者は物見遊山気分で覗きに出掛けた。ドイツのシュパイアーにある「プファルツ歴史博物館」の協力を得た好奇心を満たす良い企画だった<sup>4</sup>。定年も近づいた頃ゲーテの『ファウスト』を読み始めて以来、その主人公よりも、天上の神の掌の中にいる墮天使メフィストに関心が移った。そしてメフィストの存在、そして彼の侍女としての魔女、また作品第一部の「ヴァルプルギスの夜の夢」に登場するゲルマン神話の魔女、妖怪や怪物、また第二部の「古典的ヴァルプルギスの夜」に姿を見せるオリエントや古代ギリシア世界の異形な存在の中に、「魔女」を生み出す母胎があるのではないかと思うようになった。それらはキリスト教が西洋を支配する以前の産物、理性に拠る解釈では捉え難い存在である。そうした混沌の大自然の中、動植物のように生まれ、繁茂し、次世代を生み出す生命体の中から、さまざまな人間の文化が習合を繰り返しながら育成され、今日の西

洋文化のモデルとなったギリシア文芸、哲学、自然科学が生まれて来た。そしてその文化を継承した古代ローマ文化、更にそれらの文化とキリスト教の混合から現代のヨーロッパ文化が生まれる。明治期の文明開化のモデルとなった西欧先進国の文化である。

注目すべきはその西欧の文明化の過程で社会の上層部、教会や一般社会の支配者から排除され異端視された民衆の文化の中に魔女が誕生する基盤があるのではないか、つまり、魔女、魔女的存在はすべてが一極化してゆく文化現象や宗教の中で時代の基底に蠢き潜伏し、時折暴発しながら生き続ける存在と言えるのではないか、そして社会の上層と下層の境界に住む魔女は、両者のスケープゴートとなることにより、俗性と聖性を帯びた存在となる。このメカニズムは永遠に続くのではないかと筆者には思える。

#### アポロンとディオニュソス

トーマス・マンの『魔の山』(1924年)に極めて象徴的な場面がある。主人公、ハンス・カストルプがスイスのダボスの結核療養所に入院中、スキーに出掛け雪中で迷い生死の最中夢をみる箇所です。まず彼の眼前に地中海の公園や海辺の光景が現れる。ギリシア彫刻を思わせる若い裸体の男女の群れが青い空のもと、押し寄せる波に優美に戯れたり、ボート遊びに興じている。西欧の文化にお馴染みの理想郷アルカディアの風景、アポロンの光に満ちた空間である。しかしそれを眺めていた主人公が背後に横たわっていたギリシア風神殿の円柱の群の間を登ってゆくと彼は抑えきれない不安に襲われる。神殿の内部に入った時に、彼の眼前に、半裸で髪を振り乱し乳房を見せる魔女が二人、幼児を引き裂き貪り喰うディオニュソスの光景が展開される。20世紀最後の人文主義者(Humanist)を自認するマンのこの描写に典型的な古代ギリシア観が表現される。ニーチェの『音楽の精神からの悲劇の誕生』(1772年)のアポロンの=理性的、合理的精

神とディオニュソスの＝非理性的、悪霊の精神の二つの概念を継承しギリシア文化を見る視点ですが、この二項対立の根底にあるものを見るにはギリシア神話を今少し探求しなければならない。

### 始めにカオスありき

ギリシア神話の始めには、ヘシオドスの『神統記』（廣田洋一 訳 岩波文庫）の記述にあるように、原初神としてカオス（虚空）、そしてガイア（大地）とタルタロス（冥界）、そしてエロス（根源的生命力）があった。それらは創造されたのではなく、始めから存在していた。超越者によって創造されたものではない。ヘシオドスの意図が「第一に現宇宙の生成を問うこと、第二にゼウスを主神とするオリュンポスの神々が主権を獲得するにいたる経過を語ること」<sup>5</sup>にあるとすれば、ゼウスとヘラを中心とした極めて人間臭いギリシアの神々の支配構造は、カオスの中からつまり、倫理的な善悪の判断以前に生じたものの中から生じ、その後位階と秩序ある神々の系譜が生まれ、明確な姿を取るに至ったのであろう。ヘシオドスの著と同じ時期に成立したホメロスの二大叙事詩の誕生を待ってギリシア神話の系譜は完成し、それが西欧文化の古典となり、各種の文芸作品創造のモチーフとなった。ここに至るまでの無数の神々の権力闘争は、プラド美術館のゴヤの「子供を喰うクロノス」や、ベルリンのペルガモン博物館のゼウス祭壇のフリーズなどの残忍な絵画をはじめ数々のティタノマキア（巨人族との戦い）の絵画にその表現を留めている。そして強調すべきことは、根源的生命力エロスが原初の神であったこと、それがギリシア・ローマ神話の人間の核心をなすこと、そして後のキリスト教倫理の支配の中でもその強烈な生命力を保ち、大衆文化の根底に潜み、反権威主義的な底流となって文化を形成していることである。エロスの力を各種の法、規範、倫理などによって規制しながら転用、昇華しながら今日の文化は形成されたと言い換えることも出来る。

だがさしあたって論じたいのは魔法の系譜に繋がる女神の形態である。幾つかの女神に光りを当ててみたい。まずは西欧文学の古典、ギリシア神話の宝庫であるホメロスの作品の魔法について論じたい。

### ホメロスのセイレンとキルケ-魔法の元型

ドイツ民謡「ローレライ」、ライン河を行く水夫たちに歌い掛け、心を虜にし船を難破させる金髪の美女は、文明開化の明治期に我が国にハイネの詩、ジルヒヤーの作曲によって伝わり、今でも好んで歌われる。この歌は、古代ギリシアの魔法セイレンの系統を引き継ぐもの、ギリシア語のセイレン (Σεϊρην = ローマ字表記で seiren、呪文で縛る人) は英語のサイレン (siren) となり、美しいにはほど遠いけたたましい音と変わってしまう。ホメロスの口承叙事詩『オデュッセイア』(Odysseia) にこの半人半鳥のセイレンが登場する。第12歌「セイレンの誘惑。スキュレとカリュブティス、陽の神(エエリオス)の牛」の章です。<sup>6</sup>

ホメロスのもうひとつの叙事詩『イリアス』(Ilias) にはギリシア方とトロイ方の十年にわたる戦争が語られるが、トロイの木馬の謀略によってギリシア方が勝利を収める。その後篇の叙事詩『オデュッセイア』では、ギリシアのイタケー島出身の主人公オデュッセウスが部下の兵士ともども数奇な冒険を乗り越えながら故郷を目指す。その途上、美しい歌声と容姿で船乗りたちを惑わし、油断を誘い船を難破させる二人のセイレンのいる島に近づく。「機略縦横なる男」の彼は部下たちの耳に蠟を詰めさせ、自分は体を帆柱に縛り付け、麗しい歌声を聞きながらその難所を切り抜ける。この伝承とライン河の航行の難所が結び合いローレライの岩を巡る民謡が生まれるに至った。ちなみにローレライ (Loreley) は語源は古語ドイツ語 luen (潜む) と ley (岩) の合成語で現代語では「待ち伏せる岩 lauernder Fels」の意味となろうか。

『イリアス』や『オデュッセイア』は紀元前8世紀頃に成立したと言わ

れている。キリスト教がヨーロッパ世界に広がるはるか以前の事です。この二つの作品には、同時期に成立したと言われる叙事詩人ヘシオドスの『神統記』に述べられるギリシアの神々が、より具象的な姿をとって民衆の心に映った多様な姿で、あるときは不死の存在として、またあるときはいずれは死すべき英雄や、死す運命を免れ得ぬ人間たちとの交流の中で登場する。『オデュッセイア』には、他にカリュプソやキルケという男を惑わし長逗留を許す女神たちが登場する。彼女たちは極めて自由奔放な存在、異界に住む女性たち、なかでもキルケはオデュッセウスの部下たちを鞭の一振りですべし変身させる妖術を駆使し、一方で大将のオデュッセウスをエロスの力で呪縛する。<sup>7</sup> 大自然の中での男女の愛の原初の形です。エロスの戯れは何らの倫理的判断を交えず、また後のキリスト教社会の原罪の意識もここには窺えない。女神たちはオデュッセウスを自在に操る。

#### ペネロペイア—男性的倫理の偶像

ところが一方、オデュッセウスの妻ペネロペイアはイタケーの館で10年にわたって、夫の長い不在を理由に言い寄る多くの男たちの求愛を巧みに退けながら夫の帰郷をひたすら待っている。「主人」の帰郷後の求愛者たちに対する夫婦や息子テレマコスたちの行う復讐は、ハリウッド映画好みのステレオタイプの英雄譚になる。<sup>8</sup> 彼女はヨーロッパ社会では永らく貞節の鑑として讃えられてきた。ここに表現された「主従関係」としての夫婦の愛の形は、古代以来男たちを捉えて来た構図、男性中心社会の縮図です。男性の主人公には、キルケと同様、罪の意識は皆無、ましてやキリスト教社会全般に根付いた「原罪」という意識も存在しない。オデュッセウスは、現代的表現を用いれば、男性の英雄たちを支えてきた「男根中心主義 (Phallogentrismus, Phallogratie)」の象徴、英雄としての男性像の典型です。ホメロスの作品に登場する夥しいギリシアの神々や英雄たちは、それを継承したローマ神話と並んで西欧文明の遺産として後世の芸

術、文化に多大の痕跡を留めている。だがそれらの形象を創造したものは何かが問われる。女神たちの出自にもう少し立ち入ってみたい。

### ギリシア神話の女神たち

神話には、ユング流に言えば、われわれ人間のいわば元型が投影されており、その解読は一種の人間の欲望についての解釈と言える。ゼウスを最高神とする数多の男性神の支配するギリシア神話の構図は、現代社会の縮図、権力の機能が分化され中心がいたる所に存在するピラミッド型のヒエラルヒーの世界を先取りしているように思える。

それに対して女神たちは相反する要素を併せ持つもっと複雑な性格を見せる。それはなぜか。彼女たちの生まれを辿ってみると、たとえばアテネ神（Athene ローマのミネルヴァ Minerva にあたる）は主神ゼウスの頭から完全武装した姿で生まれ、芸術や戦争、技芸の女神、別名パラス・パルテノス（処女のパラス）と呼ばれる。またアルテミス（Artemis、ローマ神話ではディアナ Diana にあたる）は同じくゼウスの子として双子の兄弟アポロンと一緒に生まれ、弓矢を持ちニンフと猟犬を連れ狩りに出掛ける。狩人の守護神でもある処女神、またその一方では、自分の裸身を見たアクタイオンを八つ裂きにするほどの荒ぶる側面、残酷な復讐の女神の一面も持つ。そうした意味では極めて人間に近い、むしろ人間の不羈な欲望の素朴な表現といえる。しかし、彼女たちがいずれも男性神ゼウスから生まれたという出自を持ち、その権力を受け継いでいることに留意すべきである。つまり女神たちの複雑さは、神話創造者が男性神の性格を女性神に投影し、しかもその一方で処女性を彼女たちに持たせたことにある。いわゆる「泰西名画」に見られた多くの女神たちや美女たちが絶え間なく男性神の欲望の的になり犠牲になること、それが男性の英雄的行為、今日の言語で言えばマッチョの男性像として絵画史を飾って来たことにも留意したい。このような歪んだ両性関係の構図を作り上げた精神は父権性社会の



意識である。つまりそれらの神話を創造した作者の性、階級など社会の権力構造が逆にそれらの女神像に照射されている。男性的性格を持つ処女神、いわばジャンヌ・ダルクの先駆者です。ジャンヌダルクは英雄行為によってフランスで聖性を獲得し、後には魔女としてイギリスで宗教裁判に掛けられ魔女とされた。<sup>9</sup>

### 地母神たち — ヘラとアルテミス女神の場合

古代ギリシアやローマの女神たちは余りにも明晰な姿、男性神の性質、先述したニーチェの言うアポロン（太陽神）的要素が強く、男性中心主義の視点から生まれたもの、しかも処女神であり、大半が女性本来の生物としての特性、子を生む性質が欠如している。それ以前の西欧各地に見られた地母神（*magna mater*）のように胸と腰部を誇張した偶像、たとえばオーストリアの「ヴィレンドルフのヴィーナス」や、フランスの「ローセルのヴィーナス」、またクレタ島のクノッソス宮殿から発掘された「蛇女神」の像などに見られるような地母神的特徴は見られない。<sup>10</sup> 地母神がどのようにギリシアに入ってどう変身したか、その背後に何があったか。

まず最高神ゼウス（Zeus）の妻ヘラ（Hera）について見ておきたい。ヘラはギリシアの女神の中の最高神、結婚と出産、性生活の守護神であり信仰の中心地はペロポネソス半島のアルゴスやサモス島にあり、本来は植物や豊饒を司る地母神だった。<sup>11</sup> ゼウスとの結婚は、植物の生育と成熟を意味する「聖なる結婚」（*Hierosgamos*）として各地のヘラ神殿で祝われていた。ただし夫の数々の色事には悩まされ、彼女が主役を演じる機会は多くない。注目したいのは、先述したアルテミス神である。

もともとアルテミスは「ゼウスの妻として現れ、エイレイティア（分娩の女神）として動物や植物の世界、また若者に祝福をもたらす女神であった」<sup>12</sup>。エーゲ海沿岸の現在のトルコのエフェソスにあった巨大なアルテミス寺院に祀られていたアルテミス女神は、大地母神として身体全体を

無数の豊満な乳房状の牛の睾丸で飾った姿で立っており、太古には、この女神が母権性社会の象徴として確固たる地位を確立していたと思われる。

アルテミスの地母神的系譜を遡れば、古代ギリシアを取り巻いていた文明圏、古代エジプト、メソポタミア、インダス文明、あるいはエーゲ海など地中海文明の各地に見られ、その地で崇拜の対象となった地母神たちに行き着く。アルテミスはエジプトのイシス神、シリアのアスタルテ神、また小アジアのキュベレ神、同じくギリシアのデメテル神などの特性を受け継ぎ、それらの要素が習合され変化を遂げた。ギリシアに入った段階でアルテミスは、当時あちこちに見られた男性の豊饒の神、プリアポス（Priapos 男根）の対蹠的存在としての地位を失い、ホメロスの叙述に辿り着く頃には、確立した父権性社会の構造に組み込まれて、今度はゼウスの娘として処女神に変貌し、アポロンの理知を持つ明快な形象となる。元来あった死や破壊をもたらす陰惨な性格は狩猟の神としての性格の中に包摂され継承される。

こうしたアルテミス像の変容の中に、先走りして言えば、後のエヴァ、そしてそこから派生する魔女、また一方にはそこに起源を持つ聖母マリアの誕生の萌芽が見られる。アルテミスの魔女と聖母マリアへの分裂については旧約と新約二つの聖書の記述に立ち入らねばならない。その前に同じく上述の文明圏に見られた地母神マリ（Mari）について触れておきたい。

#### 閑話休題：聖母マリア

ヨーロッパ各地の教会や美術館に残るキリスト磔刑の像や絵画は異教徒である筆者には感動というよりむしろ違和感を、義（Gerechtigkeit）の証を押しつけられる圧迫感があって素直に直視できない。ドイツのあちこちの田舎の教会に入った時もそうだったが、ケルンのヴァルラフ・リヒャルト美術館へ入った時も、延々と続く中世の名も無き画家たちの磔刑像に

へきえきし逃げだし、大聖堂のマリア像を見に出かけた。マリア像ほど心を捉え人々に慰めを与えるものを知らない。ラファエロのマリア像（フィレンチェのピッティ宮殿やベルリンの国立絵画館）は女性の崇高美のアイデアとして、一方ドイツのリーメンシュナイダーなどの「哀しみのマリア」（Mater dolorosa）像（ヴュルツブルク）は、農民たちの素朴で敬虔な信仰の姿を伝えるものとして、それぞれに心を搏つ。大工ヨセフとの間に七人余りの子を儲け、その長子が救世主キリストとなる。だがローマン・カトリックや東方教会ではキリストを生んだマリアは「無原罪」、「永遠の処女」でなければならぬ以上、子は一人、マリアもまた神話的存在となり、各地にマリア像崇拜の寺院が残る。<sup>13</sup>

日本の弘法大師空海に匹敵する伝説にも似て、あるいは西欧各国に存在する聖女に関する奇蹟が続々と生まれたのと同様に、マリアは一人歩きし始めカトリック圏や東方教会圏では、永遠の聖母となる。筆者も不遜ながらマリア像の生み出す芸術性、その清澄な美しさ、その精神的深さに感嘆せざるを得ない。信心深い仏師たちが刻んだ仏像が不滅なるものへの信仰を証すにも似ている。異教徒である筆者は、藝術作品として素直に愉しむだけである。

簡単に、そして一挙に言えば、マリアもまたカオスの中から生まれた地母神の末裔である。そこにユダヤ教、キリスト教、あるいはゲルマン神話の属性（Attribute）が歴史の流れの中で付着しマリア像は変容する。

### 変容するマリアー地母神マリ

カトリック教徒の間では聖母マリアは「新しいエヴァ」と言われる。近年、神話の見直しが始まった。特に西洋の神話に登場するさまざまな女神の出自に関しての再検討である。ユダヤ教・キリスト教などの男性中心主義の作成した女神像を宗教学・人類学・社会学・地理学などの諸学問の近年の成果を踏まえ、従来の伝統的、正統派的倫理観のもとで抑圧されていた

女神像に修正を迫る記述である。筆者の手元にバーバラ・ウォーカ著の「神話・伝承事典」（訳 山下主一郎主幹 大修館書店1990年第三版）がある。副題は「失われた女神たちの復権」とされている。1960年代後半に起こった世界的規模の反体制運動、特に女性解放運動の中から生まれた書物である。マリアに関する記述はキリスト教の世界では永らくタブーであった。定着した聖なるイメージを破壊するからである。筆者は知的関心を抑え難い。同書の記述を要約しつつ論じてみたい。

著者ウォーカは「聖母マリア Mary」と「女神マリ Mari」との二つ項目を立てる。前者の記述は言う。キリスト教会の神父たちはマリア崇拝に強く反対したと言い、「マリアがセム族の神ー母、天界の女王であるマリアヌ、シリアのイシュタルの変形アフロディテ・マリ、祝福された乙女ユノ（ギリシアのヘラに対応する、筆者注）と海の星ステラ・マリスとしてのイシス、オリエントの救世主の聖母マーヤーと、その他太女神の数ある変形を合成したものにすぎないことを十分に知っていたからである」<sup>14</sup>と記す。つまり聖母マリアは地母神（太女神）たち、すなわち異教の女神たちの習合体だと見なしている。また後者の項目では、マリが「カルデア人にはマラトゥ、ユダヤ人にはマーラー、ペルシア人にはマリハム、キリスト教徒にはマリアとして知られている女性の基本となる名前。ほかにもマリアン、ミリアム、マリアヌ、ミュライン[略]などの名も派生している」<sup>15</sup>と述べ、更に「セム族はマリーエル（マリア神）と呼ばれる女神と神の両性具有の結合体を崇拜していたが、これは女性的な水の原理と、男性的な太陽の原理を結びつけたエジプトのメリラーMeri-Raに相当した」とまで述べる。<sup>16</sup>セム族、つまりユダヤ人、アラビア人、エチオピア人、アッシリア人やフェニキア人たちの先祖たちの中に生きていた女神が聖母マリアの先蹤であるとする。だがこのカオスから生まれた地母神が聖母マリアに昇華されて行くには旧約聖書のエヴァについて見ておかねばならない。

### 旧約聖書のエヴァ (Eva)

少し話は19世紀に飛ぶが、キリスト教が西欧全体を覆い「楽園追放」の図が芸術史のトポスになって久しい頃、1867年に描かれたフランスのアカデミズム絵画のアレクサンドル・カバネルの「アダムとエヴァの楽園追放」(個人蔵)を見ると、「創世記」の第3章の記述を分かり易くさせるように、まさしく啓蒙的意図に満ちた構図が呈示される。<sup>17</sup>

そこにはユダヤ教、それを継承するキリスト教の父権社会の女性観が典型的に表れている。自分たちの犯した罪、禁断の木の実を食べ、善悪の判断を知るに至ったアダム (Adam) とエヴァの姿が描かれる。エヴァは中世末期のクラナハやデューラーの「アダムとエヴァ」に見える素朴な形象とは異なり、カバネルのエヴァの姿態は、当時流行のモチーフである白い官能的な裸身と変わり、罪の意識に囚われもだえる姿で描かれている。アダムもまた疲れ果てた姿で頭を抱え、エヴァの助けを求め差し伸べた手を握っている。彼らの後ろには楽園追放の主役である神と天使が彼らを監視するように配置され、絵画の意図が明らかになる。エヴァがアダムをそそのかし、最初に罪を犯し二人が原罪を負うに至ったという結構になっている。アダムに縋るエヴァはすでに悪女と位置づけられている。なぜこのような清潔で明確な構図が出来上がったのか。話は旧約聖書に遡る。

男と女の両性関係の観点から「創世記」に少し詳しく立ち入ってみよう。「創世記」の第1章と第2章は、天地創造の神話が記されるが、それは二つの異なる資料から作成されたと言われる。

一つはいわゆる祭司資料（「創世記」第1章1節から第2章4節 a まで）、これはバビロン捕囚後の時期に成立した記述である。もう一つはそれより遙か古い時期にヘブライ語圏で成立したヤハウエの楽園を巡る物語（第2章4b 以下）である。<sup>18</sup>

前者の祭司資料では、6日間の天地創造の出来事と7日目の安息、つま

り天地創造の神聖化が語られる。「神はこれを見て、よしとされた」のである。重要な点は第1章第27節、神が自分に似せて人間を造り、彼らを「男と女に創造した」という箇所である。つまり両性は性的相違を持って創造されている。そして、「生めよ、増えよ」（複数命令形）と命じられ人間が地上に繁栄し始めるのである。ここには男性優位の言及はない。また原罪の観念もない。次のヤハウェの物語との差異に注目したい。

一方、後者の古いヤハウェの物語は第2章4節 b から始まる。ここでは「ヤハウェは土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくった」とある。その後、神は「人が独りでいるのはよくない。彼に合う助ける者を造ろう」と言う。だが動物たちを造った後でもアダムに合う者を見つけれず、神は眠り込んでいるアダムの肋骨の一部を抜き取り女を造り上げる。そして第2章23節には「ついにこれこそ わたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これこそ、女（イシャー-išša）と呼ぼう。まさに男（イシュ iš）から取られたものだから」と記される。<sup>19</sup> イシュ、イシャはヘブライ語である。ここでは女は男の身体の一部から造られたとされる。後に女性を劣性とするキリスト教社会の男性優位社会の根拠となる。

続く創世記第3章（蛇の誘惑）は、楽園追放の話となる。注目すべきは次の言葉である。16節で神が女に向かって言う。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は苦しんで子を産む。お前は男を求め彼はお前を支配する」と。そしてアダムに向かって神は「お前は女の声に従い取って食べるなど命じた木から食べた。お前ゆえに土は呪われるものとなった」と言う。そして20節では「アダムは女をエヴァ（命）と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである」と記される。<sup>20</sup>

エヴァ（Eva、古い形はヘブライ語に由来して Chawwa）はこうして「男に支配される」存在となる。

それゆえにカパネルの19世紀末のキリスト教世界のエヴァ観を代表する楽園追放の絵画は、それゆえ祭司資料ではなく、より古層のユダヤの観

点、父権性社会の女性蔑視の世界観を反映している。エヴァが蛇の唆しにより禁断の木の實リングを食べることをアダムに促したからである。それがエヴァをより罪深き存在とさせる。

### エヴァの元型を求めて

またエヴァが「すべての命あるものの母」という表現は重要である。もう少し神話の世界に深入りしてみる。このエヴァ（イヴ）、人類最初の女性の元型についても、バーバラ・ウォーカーの前掲書は記す。「イヴは中東共通の優勢な女性の神を表す名前の一つであった。ヒッタイト族はイヴを Hawwah [生命]と言った。ペルシア人のイヴは Hvov[大地]であった。アラム人（イエスの出身族、筆者注）はイヴを Hawah[全生物の母]と呼んだ。アナトリアでは、Hebat, あるいは Hepat でギリシア語の派生語 Hebe もあり、[処女大地]を意味していた。」<sup>21</sup> ギリシア神話のゼウスの妻ヘラもここから由来し、ここに血縁を持つことになる。習合体の典型の一つである。

これらの記述によれば、エヴァが中東の大地にしっかり根を張った地母神であり、セム族から発し、ギリシアに入って行く過程で習合が進み旧約聖書のエヴァ像に結晶したと考えられる。アダムに関しても、まことに多岐にわたる記述があるが、複雑極まる神話の背景に筆者は深入りする能力もまた勇気もない。

ただ最後に記したいことは、カオスに満ちた地母神の神話が何らかの作者の意図によってコスモス（調和の世界）へ造り上げられる過程がここに反映されていること、つまりモーゼがユダヤの民を率いてエジプトを脱出し約束の地カナンへ入る前にシナイ山で神から十戒を授かったこと、そしてそれによってユダヤ民族が邪教を排斥し被造物の崇拜を禁止し、多神教から一神教への統合を行い、自然存在崇拜の宗教から絶対者の出現を预言するまでに至った事実が反映されていることである。またこの過程の中で

切り捨てられたものがあつたことも認識して置きたい。現代は『死海文書』を始め、聖書外典や偽典など莫大な資料の発見、そして多様な学問分野からの新しい視点の導入、たとえばフェミニズムの観点からの研究など、神話の探索は始まったばかりと言える。ここではカバネルなどの絵に縮図化されることによって却って見えなくなった別のエヴァの形を一つを紹介し、両性が対等であった時代の、というより女性が中心であった母権制社会の自由奔放な女性の地母神的存在、「女性が太陽であった」黄金時代の地母神リリスの話を紹介してみたい。

### リリス もう一つのエヴァ

カバネルより少し後、19世紀末のジョン・コリア作（1892年）の絵画にリリス（Lilith）がある。身体に蛇、エヴァにリンゴを食べよう誘った蛇を巻きつけ、恍惚の表情を浮かべた豊満な女性の裸体像である。蛇は黒みがかつた大蛇である。先のカバネルの絵画同様、当時の風潮に乗った男性の欲望の視線が生みだした凡庸な絵画である。だがそこに投影された自由奔放な女性に対する男性の恐怖心の反映は興味深い。地母神に自己が呑み込まれるかも知れない恐怖の投影である。リリスは Lilit とも記されるがヘブライの伝説ではアダムの最初の妻とされている。ウォーカの注釈を要約すれば、遊牧民のアダムが獣との交合に飽き、夜の妖怪リリスを妻にするが、アダムが力づくでリリスを自分の下に横たわせようとした。男性上位の象徴であるこの行為を拒否してリリスはアダムのもとを逃げ出し、悪霊たちのもとへ帰ってゆき欲望のままに無数の子供を産むという伝承である。リリスはその多産と性的放縦さによって定住農民の地母神だったとされる。旧約聖書ではリリスは『イザヤ書』（34章14節）の中で「夜の魔女」（ルター訳は *Nachtgespenster* 注：筆者）と呼ばれるだけの存在、つまり旧約聖書の正典には登場しない形象だが、後の中世の偽典『ベン・シラのアルファベット』の中でアダムの最初の妻とされる。またリリ



スの娘たちであるリリム (lilim) は好色の悪霊でユダヤ人男性の夢の中に現れ性夢を見させるので彼女を遠ざける護符が造られる。まさしく彼女は中世の魔女の先駆けをなす存在である。リリスが後の女性解放運動の先駆けになったのも頷ける。もちろんここにも男性中心的観点による両性関係の歪みとその造形に痕跡を留めていることは言うまでもない。<sup>22</sup>

### 魔女像の変身

この樂園からの追放以降、ギリシア古典文化からヘレニズム文化への展開、そのローマ文化への移入、イスラエルの地のローマの支配、ローマ帝国でのキリスト教の公認へと続き、そしてキリスト教の教父たちの数多くの論争や公会議、異端の弾圧など、布教の苦難の歴史が延々と繰り返される。その後、13世紀に至り、トマス・アクイナスの神学とアリストテレスの哲学の融合によって漸くキリスト教の権威が確立した時代となる。古代ギリシアの哲学とキリスト教の精神との結婚である。

そしてかつての地中海世界の大地母神の習合の中からエヴァが生まれ、それが一方ではギリシアの処女神と習合し、女神たちのディオニュソスの側面ではなく、アポロンの明晰な姿のみが無垢な存在、救世主を生んだ「無原罪」のマリアという形象に形を変え収斂してゆく。他方、リリスの系譜はユダヤ教の内部では異端とされ、闇の世界、夜の世界に退行するが、エヴァの分身は聖性を帯びながらキリスト教の父権性社会の中で魔女として棲息を続けるのである。神話にみられた自然崇拜の象徴としてのアルテミス、のみならず地母神たちが持っていた荒ぶる自然の聖性と凶暴性を併せ持つ二面性が、一方では魔女に、片方がマリアに分かれていったのである。本来、切り離しがたい存在を宗教の権威と社会の権力が分離したのである。

## 魔女裁判のこと

与えられた紙数が尽きそうである。最後にドイツに置ける魔女裁判について簡単に述べて置きたい。先述した神学を確立したトマス・アクイナス、スコラ学の大成者は、女性を「不完全な動物」(animal imperfectum)と呼んだ。<sup>24</sup> この発言は魔女を専ら女性に位置づけるキリスト教の女性観へと繋がる。これにもまして人間を魔女と認定するにあたって決定的な影響を持った後世の幾つかの書物がある。1つはドメニコ会士のヤーコブ・シュブレンガー およびハインリヒ・インスティトリス(別名クラーマ)の兩人の手になる『魔女への鉄鎚』(J.Sprenger und H.Instititoris, Malleus maleficarum. 1468年)である。それに続いてボダンの『魔法使いの悪霊狂いについて』(J.Bodin, De la demonomanie des sorciers. 1578年)や『デーモンと魔法使いの災い』(Le fleau des demons et sorciers. 1616年)などである。これらの書の登場までにもキリスト教内部の悪魔学(Dämonologie)の歴史の中でマニ教やカタリ派などの異端派との対決を経て、飛行する魔女や悪魔との乱交、また悪魔礼拝、呪術や妖術など、魔女の特性とされた概念が広まっていた。しかし上記の書物によって初めて魔女がキリスト教世界で公的な認定の対象になる。重要な転換点である。なかでも『魔女への鉄槌』の筆者たちは、1484年にローマ教皇インノケンティウス八世から異端審問を厳正に実施するよう命令を受け、この書を著すに至った。書物はラテン語で書かれ、西のフランスのパリの神学部と並びドイツの神学の拠点であったケルン大学神学部の教授会の承認を得て、そのうえ大司教兼選帝侯の拠点ケルンで発行された。知識人たちの間に瞬く間に広がりドイツでは少なくとも16版を重ねた。宗教と学問の権威が抗いがたく結合したのである。<sup>25</sup>

魔女裁判は公的な審査の形を取って行われた。以下は「魔女の秘密展」からの情報による。魔女だという噂が立ち、それが疑惑と変わり、それを検証する裁判に移る。被告人は尋問を受ける。審問者は犯罪とされる件に

ついてさまざまな情報を集めながら細かく調べる。重要なのは状況証拠ではなく、専ら被告の自白だった。<sup>26</sup>

ローテンブルクの「中世博物館」 記憶に留めるということ。

ドイツのかつてのナチス時代の占領地始め、ドイツ本国各地に自国民が犯した犯罪を記憶する記念館が散在する。ナチスの蛮行を記憶に留めるための強制収容所、あるいはベルリンのホロコースト慰霊碑や、各地にあるユダヤ博物館などは、忘れてはならない歴史を克明に記録し、人々の心に刻むことを促す場所である。ローテンブルクの「中世博物館」(Mittelalterliches Museum) もその一つである。魔女裁判で大きな役割を果たした拷問器具の数々が、ドイツ人の特性であろうか、丁寧な説明を加えられ即物的に展示されている。自白を強要する拷問器具類の羅列である。今やドイツ・ロマンティック街道の観光の中心であるローテンブルクの旧市街地の真ん中にあるその博物館に入り、それらの数々の器具、装置を最後まで見尽くすには真実を見たい心が恐怖を厭う気持ちを上回らないことには無理に思える。それらの道具は人類が持てる知識を総動員し考案し、そこにそれを使用する人間の残酷な意志が加わり作り上げられた悪魔の道具である。異端裁判は旧教、新教を問わず行われた。ルターがアイゼナハの城に幽閉中、部屋に現れた悪魔に向かってインク壺を投げつけたことも有名な挿話であるが、悪魔の存在は新教徒にとってもあり得る存在だったようだ。デューラーやバルドゥンク (Hans Baldung 1484/85-1545年) などの画家たちが木版画に魔女を登場させたことも魔女の存在の普及に力を貸したと言える。前者の木版画『騎士、死、悪魔』(1513年)、銅板画『空を飛ぶ魔女』(1500-1503年) や後者の木版画『呪われた馬丁』(1544-45年) などが、当時のドイツに広まっていた魔女のイメージを形成するに力を持った。ヨーロッパ各地の魔女裁判は枚挙に暇がないほど数多くあり、各種の絵画にも西洋文化の負の遺産として残っている。だがここでは取り上

げんことを断念し、ただ一つ、当時の新世界アメリカのニューイングランドのセイラムで行われた魔女裁判を紹介したい。アメリカのキリスト教社会に衝撃を与えた裁判である。トンプキンス・マティスン「魔女裁判」(1853年作 ピーポティ・エッセクス美術館蔵)に描かれた魔女裁判、カルバン改革派の清教徒の村セイラムで1692年に起こり、村人185名が魔女とされ19名が魔女と認定され処刑された。<sup>27</sup> 魔女裁判は18世紀の後半に終わりを告げる。だが魔女狩りという社会現象は、その後、変容した形で、人種、宗教、政治などを巡る差別の形を取りながら多様化し、スケープ・ゴートを産みながら現代に至るまでも続いている。

#### 終わりに

男・女という性には関係無く、広大な視野に立ち、比喩的な意味で考えれば、「魔女現象」はこれまでと同じように歴史的潮流の中で変容しながら存続するものと思われる。

数日前、相模原市の障害者用施設で理解を超えた悲劇が起きた。死者19名、負傷者数十名、若い男性の犯人は平然と、予定していた殺人の対象者の数まで挙げている。犯行直前に「ヒトラーが降りて来た」と公言している。筆者は衝撃を受け、抑えきれない憤りを覚えた。現在、世界に蔓延しているテロが我が国にも及んだのだ。わたしたちの内に魔女を生み出す精神的要素があり、他者よりも自己を優れた存在と見なす意識が、もう少し大きく言えば、異端者、社会的弱者、異人種などを排斥したり、劣等視する思想が行為となって現れたのだ。他者を抹殺する無差別殺人である。わたしたち自身が、いつ魔女狩りに荷担するかも知れない不安があり、また他者のための捧げ物にされるかも知れない恐怖もある。寛容の精神の連携ではなく、憎悪の連鎖が、他者を敬う精神ではなく、他者の犠牲を求める征服欲が、世界中においてますます強まっているように思える。

ラテン語の格言に「武器も言葉も人を傷つける」(Et arma et verba

vulnerant) という表現がある。武器も言葉も人類の進化と共に生まれ、多様化し、精密になった。世界に1万五千発余りある核弾頭は自分達の生存を一瞬にして滅ぼすことができ、言葉も拡散するネットワークに乗って敵対する存在を攪乱し、武力を用いず相手を抹殺する力を持つようになった。旧約聖書のバベルの塔の故事はわれわれに教える。創造神は同一の言語を話す民衆が自己の力を過信して天に達する高塔を建設しようとした傲慢さを罰するため、民衆の話す言語を互に通じない言葉にし、意思の疎通を妨げ、そのため塔は崩壊する。わたしたちは、今日グローバル・スタンダードという統一基準に抛りながら国際間の力の均衡を保ちながらも、各地で独自の色彩を強めつつあるナショナリズムの勃興のせめぎ合いを目の当たりにしている。見通しの利かないカオスの状態が再び眼前に広がっている。だが筆者は今、ルターの言葉を想い浮かべる。「もしわたしが、明日世界が減びることを知っていても、わたしは今日もなおリンゴの樹を植えるだろう」。この仮定法で書かれた文章は、今現実味を帯びたものと変わった。わたしは自分が今いる場所で自分に為し得ることを為すしかない。

この論考は2015年秋に関西学院大学の「ライフワークスクール」の講座「ドイツ文化探訪の旅 その4」で行った授業の一コマを基に語り足らなかった部分を補足しながら纏めたものである。

2016年8月15日

注

- 1 上山安敏『魔女とキリスト教』（2013年第11刷 講談社学術文庫）60ページ以下
- 2 ボス（Hieronymus Bos van Aken 1450頃-1516年）のブラド美術館にある三連式祭壇画「快樂の園」（1503年）、ブリューゲル父（Pieter Bruegel 1528ごろ-1569年）の同じくブラド美術館にある「死の勝利」（1562年ごろ）、デュラー（Albrecht Dürer 1471-1528）のウィーンのアート史美術館にある「一万人の拷問」（1508年）やベルリンの国立版画館にある銅板画「騎士、死神、悪魔」、またクラナハ（Lucas Cranach 1472-1553年）のベルリン国立絵画館にある「若返りの泉」（1546年）などを見れば人々の間に広まっていた終末思想を背景にした当時の人々の天国や地獄のイメージを容易に想像できる。
- 3 これについては前述の上山安敏『魔女とキリスト教』、拙訳のライププラント夫妻の著書『エロスの系譜』（Annemarie Leibbrand und Werner Leibbrand: Formen des Eros. Kultur-und Geistesgeschichte der Liebe. Band I、1972 鎌田道生・孟真理訳 鳥影社 2005年）、そして後述する「魔女の秘密展」（注4参照）の記述を参考にした。
- 4 「魔女の秘密展」（公式図録 監修：西村佑子、発行：中日新聞社、東映 2015年）
- 5 ヘシオドス『神統記』（廣川洋一 訳 岩波文庫 2013年第24刷）
- 6 ホメロス『オデュッセイア』（松平千秋訳 ワイド版岩波文庫 上 2001年）309頁下
- 7 『オデュッセイア』上の第十歌参照。
- 8 『オデュッセイア』下第二十二歌参照。
- 9 「キリスト教辞典」（岩波書店 2002年）502ページ
- 10 松島道也『図説「神々の世界」篇 ギリシア神話』64ページ以下
- 11 同上書 36 ページ
- 12 前掲書『エロスの系譜』111ページ以下参照
- 13 上山安敏の前掲書は、マリアの存在を巡って第7章「マリアと魔女—女性像の二極文化」でマリアの由来に言及しているが、その中でもキリストの母マリアをめぐるエピソードを紹介している。マリア崇拜はパウロとヨハネの論争の的となっていた。パウロがエフェソスを拠点に教会を建立したが旨くゆかず、使徒ヨハネがそれに成功した。そこでイエスはヨハネに向かって「処女マリアは汝の母である」と呼びかけた、とされる。ここに至りマリアがキリストを生んだ母とされ、キリストと共に祀られ、これ以降マリア論争が公会議で取り上げられようになった、と上山は言う。同上書 122 頁以下参照

地母神・エヴァ・魔女 —魔女の元型を求めて

- 14 バーバラ・ウォーカー『神話・伝承事典』（訳 山下主一郎主幹 大修館  
1990年第三版）490 ページ
- 15 474 ページ
- 16 同上書 475 ページ
- 17 『怖くて美しい世界名画 天使と悪魔篇』（総合図書 平成 27 年）34 ページ
- 18 ライブプラント『エロスの系譜』第 8 章「初期ユダヤ教とその後における両性  
の見方」445 ページ以下参照。聖書の訳は『聖書』新共同訳（日本聖書協会  
1999 年）に拠った。なお聖書のテキスト原典は『Die Bibel: Luther-  
Übersetzung Deutsche Bibelgesellschaft, 1999 Stuttgart 』を参照した。
- 19 『エロスの系譜』448 ページ
- 20 同上書 451 ページ
- 21 ウォーカー前掲書 234 ページ
- 22 同上書の「ヘラ」の記述（315 ページ以下）参照。ギリシアとその周辺部の神  
話の習合の状況が一望できる。
- 23 ウォーカー前掲書 440 ページ以下、『エロスの系譜』480 ページ以下を参照。
- 24 『エロスの系譜』723 ページ
- 25 上山安敏『魔女とキリスト教』の第 12 章『魔女への鉄槌』の周辺、を参照。ま  
た『エロスの系譜』738 ページ以下をも参照。
- 26 同上書、及び「魔女の秘密展」（公式図録）19 ページ以下
- 27 『怖くて美しい世界の名画』（総合図書 平成 26 年出版）69 ページ